



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	労働的不安の諸相：小山田浩子「工場」をめぐって(fulltext)
Author(s)	疋田,雅昭
Citation	東京学芸大学紀要. 人文社会科学系. I, 70: 140-126
Issue Date	2019-01-31
URL	http://hdl.handle.net/2309/150695
Publisher	東京学芸大学学術情報委員会
Rights	

労働的不安の諸相

—— 小山田浩子「工場」をめぐって ——

正 田 雅 昭*
(日本語学・日本文学分野)

要 旨

小山田浩子の「工場」は、町を経済的に支配する巨大工場の中で働く人々とそこで暮らす動物たちを描いた小説である。本論は、「内部／外部」という視点及び「生態系」「分類」といった視点を補助線に、この物語から、正規／非正規を問わずのしかかってくる現代の「労働」をめぐる「不安」の諸相を読み解くことにより、広く現代社会の問題を射程に入れた小山田の文学の一端を明らかにしようとするものである。

キーワード：正規、非正規、労働、内部、外部、分類、小山田浩子

小山田浩子「工場」は、二〇一〇年一月『新潮』一〇七巻一―一〇七巻二に掲載され、二〇一三年三月に短編集『工場』（新潮社）に収録された短編である。新潮新人賞を受賞した同作は、三島由紀夫賞にノミネートされたほかに、織田作之助賞も受賞している。テキストの元になったのは、作者の大手自動車メーカーでの派遣経験であったという。¹⁾

以下のインタビューで語られる「前の職場」（眼鏡販売業）は、小山田の考える労働の特質を明らかにしている。

前の職場では、私が眼鏡を一本売ればお店の利益になるということがシンプルに実感できました。でも工場で私を受け持っている仕事は細分化され

た業務のごく一部で、自分がやっていることが何なのか説明できない。例えばパソコンで何かを清書したりファクスを送ったりする作業が、世界とどう関係しているのか全然わからないという不安と恐怖を感じたんです。

恐らく、こうした実存的不安が、テキストのテーマであるとはとまづは言うてよいだろう。小山田が現在のプロレタリア文学であるとはしばしば指摘される所以である。また、工場で目に入る物理的風景には、「穴」や「はしこ」など、何のために存在するのか理解出来ないものが沢山あり、その存在理由を想像で補完することが、幻想性のモチーフとなることも語っている。マジックリアリズムと解される、現実の非正規労働者たちの実存的不安感覚と幻想世界の融合

* 東京学芸大学 日本語・日本文学研究講座 日本語学・日本文学分野 (184-8501 小金井市貫井北町4-1-1)

は、小山田文学の特質であるが、恐らくこの両者は、相互補完的であるだけでなく、同じ現象の裏表なのではないだろうか。本論は、こうした小山田文学のマジックリアリズムの構造をさぐるうとするものである。

同インタビューにおける、「工場ウ」「洗濯機トカゲ」「灰色ニユートリア」などテキストに登場する動物たちについての言説も興味深い。

小山田 私にとってはいるんですよ。凶鑑に載っていなくても、この世界にはいると思って書いています。職場は閉じた空間だから、内側にいる人にとっては当たり前でも、よその人から見たら変なところが見えないものが絶対にある。一度中に入って同化したら変なところが見えない。外から来た人だけが「あれは何？」と驚く。そういうことって、レベルはちがってもいろんな会社であると思うんです。

ここでの小山田の指摘を換言すると、存在（いる）とは、「凶鑑」（発見と分類）の問題でありながらも、「内側」からの視線（外部ではない視線）、「同化」（こそが、非存在（いない）を生み出すということになる。この内部／外部、同化／異化という問題も、小山田の世界観を構築する上で欠かすことのない要素である。また、同インタビューの中で、職場を一つの「生態系」とあると比喩する小山田の感覚は、職場に同化してしまった人間を「固有種」とする感覚と同種の関係があり、そこに欠けているものもやはり「外部」である。これを動物／人間の関係で考えれば、外部という視線（自己をも客観視する視線）を失った人間を「動物」と考えることにより、工場の総体を決して把握しえない従業員たちと、自らの環境を客観視しえない動物たちが同じ場所です生活している空間としての「工場」という様相が明らかになってくるだろう。

津村記久子の書評²⁾は、こうした動物と人間の関係にさらなる示唆を与えてくれる。

三者三様に、異様なまでに大きな工場の魔性のようなものと、その妖しさからはねじれの位置にあるような、働くことの徒勞が細かく描かれる様子は、どっちをちゃんと見たらいいんだ……、という軽い混乱を起こさせる

のだけれども、よく考えたら、世界は普通に巨大な建物も人の労働も内包して、それらが近いものとして存在するので、この偏りのない精緻さはとてもまっとうなのではないかという気がしてくる。

外部的な視線を有することなく生きていく動物たちの諸相は、人間の「労働」する姿と変わらないという指摘は、「労働」という行為に意義を見出そうとする人間の思考自体が、何かしらの絶対的根拠を有するものではなく近代的な思想にすぎないことに気がつかせてくれる。労働そのものが近代的概念であることは、我々にとって常識ではあるが、にもかかわらずであるがゆえに近代人は、自らのアイデンティティの多くの部分を「労働」に負わせてきた。たとえ生き甲斐の様なものを余暇に見出したのだとしても、それは何かを見出すべき「労働」から何も見出すことが出来なかつた反動としての行為に過ぎない。いずれにせよ、「労働」に何らかの根拠を見出そうとすることは、答えのない自己言及に過ぎないのではないか。これが本論で言及してみたい、牛山と古笛の問題系である。

さきの新潮新人賞の選評³⁾で、浅田彰、福田和也の両者はこのテキストを「カフカをライト」にしたようなという同じ表現を使って「不条理」ものとしてとらえているが、この作品の評価はそこに描かれる人物たちを、「労働」を「不条理」と捉えるための媒介として考えるか、閉鎖的な環境における人々の「労働」する姿を「不条理」として捉えるかにあるようだ。一方、全体を冗長として捉える傾向も少なくなく、桐野夏生や町田康の選評でふれられる「工場の中の生き物の研究」というレポートは、それを最も象徴するシーンとして指摘されている。だが、本論では、このレポートはテキスト中で重要な機能をなしていると考えている。

さらに、「工場」の描写と人物の描写も、対立的な構図よりはむしろ相互補完的なそれとして描かれていると考えるべきだろう。以下の矢澤美沙紀の言説は、これらの要素を分断することなく考え、その有機的関係性を考慮している点で重要な指摘である。

「工場」はそれ自体が一つの「生態系」であり、三人はそれぞれ主体性

を奪われ、「馴化」して、そのうち二人は「珍種の生物に変身」する。この三種の生物はある意味「最新の進化型」ともいえる。またこの「工場」の経営者が何者なのか、といった問いが生まれないことから見るに、「工場」とは日本国のことだったのかもしれない。「工場」はその内部だけで完結しており、「安全」なのだ。したがってここでは主体性など必要ではない。そういうわけでここでの労働者はみな一様に「主体性を奪われている」のである。

「工場」それ自体が「日本」の比喩であるかどうかはともかく、「生態系」という概念は動物／人間という排中律を無効化していることは間違いないだろう。本論の主たる関心は、こうした無効化の及ぶ範囲とそれを可能にしているテキストの構造である。

1 ゲシュタルト崩壊する対他意識 — 佳子の場合

テキストを一読してみると、多用される錯時的な技法や視点人物の切り替えが印象的である。

橋の上から見ると鳥がいる水辺は遠かったが、数羽の鳥がみな海の反対側、工場の方を見ているのはわかった。細い首を握ればインクがつきそうに羽がぬらぬらと濡れて光っているのも感じられた。もうすぐそこが海で、河幅が大変に広くなっている辺りは汽水域ではないかと思われるが、そんなところでウは生さられるのだろうか。ウミウだろうかカワウだろうか。僕は汗を拭いた。(13)

(引用末尾の(数字)は引用頁数。傍線は論者による。以下同様。)

テキストの始めからこの引用の直前までの視点人物は「牛山」である。ここで、「私」という一人称が突然「僕」となり読者は戸惑う。この後に展開されるのは、新入社員におこなわれる「ウォークラリー」の場面である。先に引用された場面が工場に来たばかりの頃であるのは確かであるが、それが「ウォー

ラリー」のシーンに対して前後どちらになるのかは、はっきりしない。こうした時制やシーンの混乱について、作者は以下の様に語る。

— 話者の切り替えといえは、牛山佳子さんだと思っていたらお兄さんに変わっていると驚きました。

小山田 はじめは牛山佳子の視点だけで書いていて、途中でコケ博士の古笛よしおを出そうと思って、お兄さんは最後にはめ込みました。

作者によれば、元々の物語は「断片」として存在しており、それを「はめ込み」という形で構成したものであると言う。その意味でこの物語全体は、「断片」の集積体であると言えるが、一方で「工場」というテキスト全体から考えると、それぞれの「断片」は「論理的」に結合しているとは言い難い。先のインタビュー言説などは、そのことを明確に語っている。もちろん、「論理的」な接続の欠如は、その他の全ての結合——例えば「有機的」な結合など——を否定するものではない。このテキストは、むしろ一部と全体という最早古典的ともいえる形而上学哲学が、新たな形でテーマとなっていると言つてよいだろう。

むろん、このテキストにも「全体」から下降する統括的な構成を考えることも可能だ。たとえば、テキスト冒頭が「工場は灰色で、地下室のドアを開けると鳥の匂いがした」から始まり最後は、「地下一階の印刷課分室」で「私は黒い鳥になつていた。人の足が見え、腕が見えた。灰色の塊が見え、緑色も見えた。潮の匂いがした」と終わる。テキストは、「地下室」と「鳥」と「匂い」によつて見事に円環し閉じられて、いる。だが、テキスト全体を見渡せるのは、読者や作者の特権であることは対称的に、テキスト内のどの人物も自分の属している「全体」を見渡す位置に立つことは出来ない。

物語では主に三人の人物に焦点化しているが、これらの人物を外部から統括する語り手は明確には存在していない。牛山佳子と古笛は非常に細かい観察眼を有しているのだが、その一つとして顔への視線が挙げられる。

工場は灰色で、地下室のドアを開けると鳥の匂いがした。「本日十四時からの予約で、面接にうかがったのですが」地下一階のドアを開けてすぐにある『印刷課受付』と書かれた札の下には太った中年の女性が座っていて、私の顔を見ずにうなずいて受話器を上げて内線かけた。□紅がまだらに剥けている。「担当者が参りますので」と彼女が言っただけ、スーツを着た、顔が赤黒くて長四角い、中年の男がやってきた。ずいぶん近くに内線したものだ。手に、私が事前に郵送した履歴書と職務経歴書が入った、『履歴書在中』印の封筒を持っている。「印刷課分室の後藤です。どうも、本日はありがとうございます」「牛山と申します。よろしくお願ひ申し上げます」顔に「濁って」顔につやがなく、目が濁っている。白目が黄色くて、黒目との境が曖昧になっている。酔っ払っているのか？それとも、過酷な労働を強いられるであろう工場の中管理職は、このような生気や覇気の無い顔色になってしまふものだろうか。

(7)

受付の中年女性の「まだらに剥けている」「口紅」。印刷課分室・後藤の「濁って」いて「黄色く」「黒目との境目が曖昧」な瞳。他に同僚の「猪首で分厚い眼鏡をかけていて、眼鏡の奥の目がとても小さくて丸い。黒いビーズ玉のように」な眼。さらには、兄の彼女の「部品部品が全体の面積に対して小振りにできていてただ口だけが横長に大きく、笑ったり発話する時には深い皺ができる」顔など、身体の細かなパーツや動作に注目して観察している。だが、こうした観察は、他者への理解の入り口ではなく、むしろ否定的な意味を帯びた識別の記号として機能してゆく。

拒絶の対象に否定的な身体の特徴を見出しているのか、否定しようとする気持ちだが、身体パーツの否定的な表象を生むのか定かではないが、顔とは本来ゲシュタルト的な表象である。そこに見出されるものが美であろうが醜であろうが、ある種のバランスを根拠にした判断であり、その判断自体は流行など絶対的とは言えない根拠によって成り立っている。多くの場合、顔を構成する身体パーツへの物理的注目、そうした無根拠性を露呈するきっかけとなる。

牛山佳子は、大学で「コミュニケーション」を学んでいる。平成七（一九九五）年に始めて学部として設置されたコミュニケーション学は、同時にカタカ

ナの名前の学部としても日本初であった。佳子の卒業した大学も、こうした改組のブームを受けたものであろうし、「メイ牛山」の死去が二〇〇七年二月のことなので、佳子はこうしたバブル崩壊以後の不況期の中で大学時代を過ごし、そして就活・転職していたことになる典型的なロスジェネレーションである。基本的に自己にも他者にも、そして労働にさえ強い関心があるわけではない佳子は、実は「コミュニケーション」も得意な方ではない。

こうした佳子の観察眼は、初めて紹介された兄の彼女にも適応される。

兄が連れてきたのはマロンパイを五つ土産に持った若い女性で、顔は部品部品が全体の面積に対して小振りにできていてただ口だけが横長に大きく、笑ったり発話する時には深い皺ができる。

(68)

兄の彼女に対しての第一印象は決していいものではなかったが、この直観は間違っていない様である。後日、偶然居合わせた喫茶店で、兄と恋人の会話を聞いてしまう。

「前略」ずーっとネガティブな愚痴。対応しようがないじゃない。ずっと眉間に皺寄せてるし。そういうのが嫌い。嫌いとかが言ってごめんね。プロの発言じゃないけども「何のプロだ？」「別にいいんだけど、そんな妹と仲いいわけでもないし」「いや、前会って思ったけど普通に仲はいいと思うの。ごめん怒った？怒った？」「怒ってない」「どめんね、ごめんだけどもうん、まあそういう感じ。今仕事あってよかったじゃん。もし万今の職場もしくじったら、一応ウチの会社に登録してもいいけど、正味いいところにコーディネートする自信ないわ」「いや、今は大丈夫だろ。むしろ向いてるくらいじゃないか。喋らなくていいし、給料も安いがフルタイムだしな。お前何だか妹を面接してみたんだ」「職業病よ」

(93)

兄から紹介された仕事は実は恋人の斡旋だったのだ。それも、兄自身も同じ工場の非正規社員として働いているという。また、先日の会食は、兄が恋人を妹に会わせただけではなく、妹を恋人に会わせた「面接」だったのである。結

果、ここでの恋人の視線は、面接官のそれと同様になるのは当然であるとしても、恋人の評価は、職業人としての公平なそれであるとは言えない。なぜならば、立場は恋人である兄も同様であるはずだからだ。

こうした配慮の欠如は、むしろパーソナリティの問題であるとも言えるが、一方で正社員／非正規社員という現状に、何かしらの根拠性・必然性を信じて疑わない態度であるとも言える。概して社会的勝者は、その敗北の根拠を自己責任の問題として見出し、それが社会的システムの問題であると考え、視点が抜け落ちる。外部が「欠落」しているのは、工場内部の非正規職員だけではないのだ。工場に派遣しようとする正規職員にだって、「外部」は欠落する。

テキストでは随所に、両者の間にある見えない壁の様相が描かれるが、この壁が見えないのは、非正規職員側からだけではないのであろう。

2 内部と外部という排中律の無効化 — 古笛の場合

工場にやってきたのは初めてではなかった。小学校の時の社会科見学で、スチュワードのような服を着て小さい帽子をかぶった女性に引率されて工場博物館や見学コースを見てまわったことがあった。(中略) デイズニールランドくらいはあるのではなからうかと思つた。デイズニールランドと向様に土産が充実している点にも感心した。バスを降りてから見学する建物まで移動する間、スーツや作業着や白衣などいろいろな格好をした大人たちが歩きまわっており、彼らの隙間から見える建物は折り重なつていて、何も見通せなかった。この町を取り巻いているはずの山々も見えなかった。この町にいる限り、学校にいやがパートにいやが四方八方は山に囲まれているのだが、工場では何にも囲まれておらず、むしろ山よりも遠く大きなものに取り巻かれているような気がした。(9)

デイズニールランドが、その幻想性(異界性と言つてもよい)を守るために、園内から外の現実的な風景が視界に入らないように細心の注意をはらっていることは有名だが、大きさ、土産、外への見通しのなさ(閉鎖性)など、工場をテーマパークに見立てているのは象徴的である。また、多くの企業都市がそう

であるように、この工場は物理的な閉鎖空間を構築しているのみならず、周囲の町(工場の外部)にもその影響は及んでいる。

大人になってみると、工場というのは莫大で広大で、この土地に生活している以上その影響を絶えず受けていて、それゆえに無視せざるをえない存在であつた。昔からの町に住んでいる者なら一族の中に工場関係者や工場の子会社の関係者、取引先に勤めている者が必ずいた。工場や子会社のロゴマークをつけた営業車が町を走りまわり、教育熱心な親は子供に「工場で働くことの素晴らしさを言つてきかせた。」(9)

佳子は、それまで工場関係の仕事に就いたことがなかったが、その憧れのよくなものは彼女にとつても例外ではなく、むしろ「無意識のうちに諦めていた」と逆説的な形でより強固に内面化されていた。面接の結果、正社員の公募であつたのにもかかわらず、契約社員としての採用を促されることになつた佳子だが、それに「甘んじる」といった考え方は浮かばず、むしろ転職を繰り返してきた「身の程」に合った対応であると考えた。

たとえ、正社員ではなくとも、フルタイムの仕事で「工場」に勤められることは、佳子にとつてそれほど魅力的だつたのだ。しかし、その過程を「私と後藤が出すべき結論がより近いものになつた」と捉える牛山の描写は、どこか他人事の様なアイロニー感覚が伴う。この佳子の感覚には、労働や他者に対する主体的な関心の欠如が背景にあることは、後に明らかになる。

面接の結果、佳子に与えられた仕事は、印刷室付ではあるものの、編集とは関係なく、終日シュレッダーをかけるという業務であつた。ここで、先の「黒い鳥がいて……」の部分につながるが、これまでの視点人物であつた牛山佳子から古笛への突然の変換が生じるわけだが、一方で、絶えず工場を見つめる鳥たちの色が「インク」に喩えられているのは、印刷室のシーンと表象的には接続している。時間や視点は様々に錯綜し、物語のクロノジックな理解に揺さぶりをかけながらも、表象レベルでは各断片が様々な形で結合してゆくのだ。例えば、以下の場面。

新入社員の研修と親睦を兼ねた工場周回ウォークラリーの一行は、あちこちに立ち寄りながら、初日の夕方近くになって、工場の南側、海へせり出した地区に差しかかり、北地区と南地区を分かつ大きな河にかかる巨大な橋を渡っていた。橋は片側二車線の道路と、幅五メートルを優に超える歩道が往復ついでいて、一団が橋を渡り始めてから渡り終わるまでの間にバスが五台、首をたたんだキリンのような形のシヨベルカーを載せたトラックが三台、コンクリミキサー車が一台、何だかわからない重機を載せたものが五台、それから乗用車が数十台追い越して行った。(13)

ウォークラリーは新入社員の研修や親睦を兼ねたイベントだが、特別待遇の古笛はこのイベントに参加する義務はなかった。にもかかわらず、このイベントに参加した古笛にとって、歩くことは象徴的な意味をもっていた。そもそも、この物語の中で、古笛は常に「移動」する主体である。ひたすら工場の中を歩き回る。歩き回るとは、与えられた「仕事」に「答」を見出すためである。しかし、いつまで経っても緑化はもとより、コケの分類すら滞っている状態である。いくら先を考えても、その仕事に見通しすら立つことはない。むしろ、工場により与えられた待遇には一切の不満はない。しかし、工場の中で自分が何をなすべきなのか。その「答」は、誰からも与えられないのだ。

さらに、工場内を移動する主体にとって多くの車は、重要でありながら意味の理解できない存在の象徴である。視点人物が変化しても、工場内の敷地を歩き回れば多くの車を目撃することになる。古笛の仕事は単独である。工場内で見かける人々、鳥たちが、彼にとつて全く理解出来ないことは、他の人たちの仕事がかく理解できないことと同義である。もちろん、これらがどんな種類の車であるかが理解出来ないわけではない。それは鳥や人も同様である。だが、結果的にそれらが理解不能なのは、工場という「全体」が把握されないからだ。

ところで、この場面の直前で入れ替わった視点人物である古笛が抱く仕事に対する疑念は、就業前から一貫していた。面接のため工場の本社へ行ったつもりが、そこは入社後に必要な機材の話をする場であったのだ。

おかしい話だ。理不尽だし奇妙だ。一体誰の発案でどんな話が進んだのか？「えー、はい、ですからですね、その、お一人ということ、負担をかけたくないなということ、ご自分のペースで、まずは、工場の敷地内のコケを採集ですとか分類などをしていただいでですね、それから、まあおいおい緑化に着手していただくということになります。そうですね。そうですね。一旦は分類をしていただくんです。そういったことで、方向性が見えましたでしょうか？」(21)

今まで「研究」で分類していたことと、今後「仕事」で分類を続けてゆくこととの何が異なるのだろうか。「研究」であれば「出口」が必要ないが「仕事」であるならば、何かしらの「出口」が必要であるということだろうか。古笛の状況はむしろ恵まれたものであると言つて良い。この古笛の疑念は、「誰の発案でどんな話が進んだのか」という部分に象徴的に現れているように、それを統括（計画）する外部に重ねた視線である。しかしながら、当事者である古笛はもちろんなこと、担当である後藤も青山もその事実を知る位置にはいない。外部はいつも空白なのだ。

大学で分類学を専攻していた彼は、まだまだ「分類」という学問的営為にかかわっていたかった。ところが、彼に与えられた「緑化」とそれに伴うコケ類の「分類」という「仕事」は、彼が望んでいた「研究」とは全く異なるものだったのである。

「いきなり出世頭になったな、古笛。生物の研究生から工場の社員なんて、なかなかないぞ」と彼ら、彼女らは言ったが、工場に就職しただけで出世頭というのは、十分嫌味だろう。幸運な奴だと思つているのだろうが、自分でそうは思わないのだから、やっかまれるだけ損だ。いつまでも大学で分類学をしていたかった。「分類学とかいうのはこれから、学問としてどうしても先細りだからな。生物の類でも、遺伝子たら何たらいう話なら違うけどな。ましてコケの分類なんぞ、言うては何だが酔狂みたいな学問ということになるであろうしな。」(14)

分類学という営為は言うまでもなく分類、それ自体が目的である。何かの分類が当面の目標になったとしても、分類そのものが「完成」することはない。学問である以上、それは当然のことである。しかし、「仕事」として与えられたのは、何かのための分類であり、それは「緑化」という形で明確な目標が定められている。それに伴う分類も当然、目標が定まっている。目標は意義や到達点を生み出し、時間に応じてそれなりの「達成」「不達成」という結果を得ることが出来る。だが、ここでは「仕事」という概念こそが、「目標」を失わせ、そこから得られるであろうアイデンティティを奪っているのだ。古笛を一番悩ませたのは、自らが与えられた仕事の意味や意義を見出すことが出来ないことだった。コケ類による緑化事業もそれに伴うコケ類の分類もどこへも行き着かない。

さらに、本来「分類」とは、「外部」からの視線である。何かしらの「全体」を前提とした上で行われる営為である。動物という上位概念があり、○○類という下位概念としての「分類」が可能になる。しかし、工場の「仕事」は、それを担う構成員に「全体」という概念を提供しない。工場に存在しているのは、「全体」なき「部分」。断片としての存在のみなのである。

それにしても不思議なのは、古笛は「全体」という誘惑から自由になれなかったことである。もちろん、自分の興味関心に従って終りのない研究に打ち込むことと、強制的に興味関心の持てない分類や調査をさせられることは全く意味が異なるとも言える。しかし、「いつまでも大学で分類をしていたかった」のならば、それを「仕事」で実現出来るのは、むしろ喜ぶべきことのはずだ。さらに、ここで「仕事」を「仕事」たらしめているのは期限や達成という問題であるが、それすら周囲は何の強制もしてこない。強制どころか、好きなペースでやってよいとすら言う。期限や達成の問題に拘泥しているのは、むしろ古笛自身なのだ。

一方で、古笛の周囲や古笛自身にもそのことは了解されている一面もある。

「お前は内向きというか、社交性がないからな。人と関わって働く、という道は自分からは選ばんだろうと思っていたが、またとない幸運じゃないか。教授に感謝しないといけないな。工場にもだ。感謝の気持ちを忘れる

んじゃないぞ。嫌なことがあったら、俺には言え。でも、周りには言うな。もし、その嫌なことが理不尽でおかしかったら、俺がどうにか方策を授けてやるから、自分では動くなよ。しかし、それはそうと、感謝の気持ちを忘れないように」誰に感謝するというのか。大体ありがたくもないのに誰が感謝するか。(17)

ここでは、普通の仕事に就いて独り立ちすることを当然している両親との違和感が出されているが、この「工場」で働くことが出来るという価値は、牛山と同様に古笛も内面化されているのだ。

こう考えると、古笛と牛山佳子は、非常に似た存在であることに気がつく。

名前こそ今思い出せないが、孫の顔までよく覚えていた。鯛のような形の小さな目をしていて、額が突出している男児だ。(中略)老人はタオル地のハンカチを作業服のポケットから取り出して首元を拭いたが汗などかいておるまい。鍍だらけの皮膚の汗腺はもう死んでいるのではないか。(38)

古笛が他者の身体を捉えようとする視線も、牛山と同様のものが見出される。古笛のおかれている位置は、思いの外牛山に近い。

3 古笛と牛山 ―食の両義性

こうした古笛の「仕事」に対する姿勢は、指導教授に仕事を紹介して貰った時から全くぶれていない。

いつか教授は納豆にマヨネーズを入れるとうまいと言っていた。学食ではマヨネーズは小袋に入って十円なので節約したのだろう。何が減量だ。「俺に言われても知らんよ。考えてもみなさいよ、工場だぜ」教授の口が糸を引いている。工場の場所は大体知っている。工場の製品も知っている。いくつか使ってもいる。そしてその工場が自分を労働力として必要としている？どうにもありえないことだ。「今の段階では就職ですとか、そう

いったことはまだ考えておりませんし、他に人はいませんか」「いない」教授はすぐに一度言い切って納豆の糸を箸で切った。「古笛君、工場からこの大学にわざわざ求人を出してきたんだぜ。うかつな人材を薦めたら、今後の大学から工場への就職に関わるでしょう。優秀な人物を紹介するべきでしょう。そうすると、俺には古笛君しか思い当たらんね、ましてコケとなると」空になったどんぶりにほうじ茶を注いで割り、はしでかきまわし、納豆が糸引いているのをちゅちゅと音を立てて飲み込んだ。また梅干しを口に入れる。

(16)

ここで古笛の視線は、教授の食事に集中している。食欲をそえられるような食べ方ではないが、そもそも人間の咀嚼を細かく観察することは、食という行為のもつ記号性を剥がしてゆく。それは、対象が教授でなくとも同じであることは言うまでもないが、教授に対する悪印象が結果的に食事する姿から悪い印象を引き出しているとも言える。

こうした摂食行為のゲシュタルト崩壊とでも言うべき描写は、牛山佳子にも共通している。

兄の恋人に突然ちゃんづけで呼ばれて、反射的に内臓にイグアナが入り込んだように不愉快になった。今まで妹さんと呼んでいたのに急に、どうしてちゃんづけで呼ぶのか。私はよしとちゃんだのよっちゃんだのと呼ばれるのが大嫌いだ。(中略) 今まで遠慮していた恋人への憎しみが湧いてきた。私がちゃんづけで呼ばれることを好まないのを知っているはずの兄は別に何か言ってくれるわけでもなく口を動かしている。いたたまれない気持ちになっっているのだろう。私は愕然としてこの不愉快を無言でやり過ぎそうとしたが、恋人は屈託なく笑いながら今度は海老フライではなくて梅シソ巻きカツをボン酢に浸して一口食べ、さらにソースをかけてもう一口食べた。中に梅干しが入っているのに。

(70)

後に兄と恋人との会話を聞いてしまい、恋人に最悪な印象を確信してしまう場面でも、直接見ることが出来ないコーヒーマシンの飲み方を嫌な感覚とともに詳細

に思い浮かべたりしている。顔を身体パーツに還元してしまう様な見方と同様、摂食行為のゲシュタルト崩壊は、いい印象を呼び込まない。

もちろん、多くの場合はそうだったとしても、こうした摂食行為に対する注目は、常に悪印象をもたらすというわけでもない。

「コマーシャルしましょう。飲み会をしましょうよ」私がシュレッダー場で働き始めて一週間後、後藤が言っていた通りにリーダーが復帰してきた。思いのほか年齢そうなる老爺だ。皺くちゃで、なんだか今にも砂になりそうに華者だった。長患いではなかったのか、顔が黒くむくんだりやつれたりは見えないように見えた。

(39)

リーダーの復帰によってシュレッダーの職場には人間関係が甦ってきた。どうやら関係性を媒介する潤滑油の様な存在であったらしい。「コマーシャル」とは恐らく「コミュニケーション」の誤用であろうが、そのことに対する言及はテクスト上に全くない。「コミュニケーション」を学んでいた牛山には、その能力が欠如しており、「コミュニケーション」という言葉すら覚えていないリーダーがその能力に長けている。深刻で重暗いテーマが横たわるテクストでありながら、随所にあるこうした諧謔性が物語の印象に幅を与えている。

リーダーが呼びかけた共食は、職場内の人間関係を一気に結びつけた。

おいしかったがもうもどしそうで、口を開いて喋り続けながら息を吸わないといけない。私は自分がいかに今まで苦労してきたかを喋っている。自分の声自分でよくわからない。私が喋るべき番なのかわからないが口が動き続ける。逸見さんが肉用の箸をひっきりなしに操りながら言った。(中略) 逸見さんの口元は笑った形になっていたが、眼鏡の奥の黒眼が小さくなっていて老けて見えた。私は声を出そうとしたが、口の中がねばねばしていて、レモンサワーの空いたグラスから氷を一つ口に入れてすぐ出した。歯に滲みた。

(64)

確かに摂食行為そのものは、おぞましい一面を有しているが、それを覆い

隠すのは、摂食への欲望であり、食事の楽しさである。ところで、「労働」において食事とは何なのであろうか。テキストは、この興味深い関係をも内包している。以下は、新入社員が参加するウォークラリーの一場面である。

東側の建物をいくつか紹介したり売店にも寄りながら、十二時頃昼食をとるのがこの辺りにあります社員食堂です。ここで、特製新入社員定食を用意してもらっているのですが、もし遅れて一時を過ぎると、社員食堂のパートさんが片づけ終わるのが遅くなってしまうって、迷惑をかけるので、ここまではしっかりと時間通り歩いていきましょうね。ちなみに社員食堂は工場内に百近く、他にもレストランなどいろいろありますので、地図にしろしをつけないで行くといいかもしれません。正直おいしいところとそうでないところがあります。その辺りは青山さんが詳しいので、どんどん質問してくださいね。ね、そうですね、青山さん？ えへへへ。(23)

このイベントで工場内を歩くことには、空間的な把握という一面があることは言うまでもない。だが、地図の様な俯瞰的な視線(外部)が提供されるのは、あくまでも入社の時だけなのである。徐々に会社に「馴化」してゆく過程で工場全体がどうなっているかということはどうでもよくなってしまふ。各部署に配置された社員は、隣の部署ですら何をやっているのか理解出来ずまた理解しようとしなくなる。輸送係(DUNYU)は様々なものを運ぶが、運ばれるものがどこから来てどこへ行くのか理解出来ない。また、工場内を通る様々な車も、何のためにどこからどこへ行くのか、こうしたことは社員たちの理解の範疇にはない。その意味で、地図上で主として説明されるのが、食事や売店であることは象徴的である。

食事の時間とは、狭義の意味では「労働」の時間ではない。だが、限られた休憩時間の中で食事をするには、限られた空間の中での選択肢しかなく、それが午後の「労働」の活力になるという意味では食事は「労働」の裡に組み込まれている。

また、テキストで「食」は、人と人との関係を引き離す外部的な視線として作用することもあれば、関係を生み出し新たな内部を構築する行為として描か

れることもある。この両義性は、後に人間と動物という問題系に接続してゆくことになるだろう。

4 牛山の兄 — 記号のゲシュタルト崩壊

牛山の兄も工場の非正規社員であった。恋人の斡旋であるから、非正規であることは最初から理解しての入社であり、その意味で妹よりも「外部」の視線を有していると言える。だが、工場の内部においては、兄妹の立場はそれほど変わらない。

目が覚めて気がついた。やけにわからない文章だと思つたら俺の方が眠っていた。眠いと思う間もなく眠っていた。夢まで見ていたようだ。何か黒いものの影がちらちらと目の前に残っていた。慌ててあたりを見まわしたが、今朝から出現した間仕切りのせいで誰にも見られていないようだ。真後ろから覗きこまれてもしないかぎり見えるわけがない。(24)

兄の労働には、常に睡魔がつきまとう。前職のシステムエンジニアという仕事は、コンピュータの外部に自らを置くことで成り立つという意味で、管理する人間の側に主体性は存在した。しかし、この工場での校正は特殊であった。この校正には、「外部」の「参照枠」が存在しないのである。校正には基準となるものが存在しなくてはならず、それは単なる辞書類を意味するのではない。かつてヴィトゲンシュタインは『論理哲学論考』の中で以下のように述べている。⁽²⁵⁾

Aは石材によって建築を行なう。石材には台石、柱石、石版、梁石がある。BはAに石材を渡さねばならないが、その順番はAがそれらが必要とする順番である。この目的のために、二人は「台石」「柱石」「石版」「梁石」という語からなる一つの言語を使用する。Aはこれらの語を叫ぶ。— Bは、それらの叫びに応じて、もつていくよう教えられたとおりの石材を、もつていく。—これを完全に原初的な言語と考えよ。

言語の習得を意味のそれではなく、その使用法の習得に見出した有名な例であるが、この例に則れば、「台石」という語を習得するには、「台石」という言葉を上司が叫びそれを部下が運んで行くという姿（あるいは同様の事例）を、何処かで経験している必要がある。その経験が「外部」の「参照枠」として機能してこそ、「台石」という言葉が適切に使用される。同じ言葉でもそれが使用される経験は様々であり、そうした経験の中で現場に最もふさわしい「参照枠」が選択されるのである。

校正という作業において、辞書（字書）だけでは「参照枠」とはならない。なぜなら、それは経験の蓄積ではあっても、どの経験（意味）が適応されるかには、別の「参照枠」が必要だからだ。例えば、筆者の原稿の様な正しい（と思われる）ような「参照枠」の文章があったとしても、その「参照枠」の正しさは、何か別の「参照枠」がないと保証されない。辞書的に誤用であったとしても、その文章の用途やジャンルによっては意図的な表現である可能性は排除出来ないからだ。つまり、ある文章の校正には、その文章の書き手や読み手による空間の「外部」の位置に立つ必要があるのだ。

ちょっと作業なさったらわかると思いますけど、よくわかんない仕事なんですよ。赤入れるじゃないですか。で、出すじゃないですか。で、出してからしばらくしたら、同じ内容の原稿の、前よりもっとミスが激しいのが入ってたりするんです。じゃあ先にやったのは何だったのっていう。誰かが私たちの訂正を見て直してはるはずなんだけど、それがどこの誰かも知らなくて。赤を入れなきゃならない場所は結構あったりするんですけど、内容が変わっちゃうようなすこいのはなくて、漢字変換が違ったりとか、段落の始めが一字空いてないとか、そういうのがちよこちよこあるだけなんです。そもそもそんな大きなミスはないので、まあ重大なミスは基本ありません。ないです。

だが、この工場の「校正」対象には常に「外部」が存在しない。また、文章自体がどのような目的で誰によって誰に向かって書かれているのかを把握することが出来ないまま「校正」しなければならぬ。また、「校正」者のミス

見出しうる他者の目も存在せず、自分の仕事の結果を知る由もない。その上、一度校正した原稿が何の反映もなく戻ってくる。永遠に続く外部のない「校正」なのである。

「まあ一応ちゃんとミスがないようにやんなきゃ駄目よ。サインがどうだとかじゃなくて、万が一、連帯責任になっても困らないようにね」カスミさんはうなずいて「そうですね、ありがとうございます。気をつけます」と言っただけを見た。「じゃあ、そういう感じをお願いします。(29)

この「仕事」を支えるのは、自らがもつ「仕事」への倫理観しかない。工場の労働の殆どは、この自己循環的であるがゆえに出口がない。この閉塞感を象徴するものが、繰り返しおとずれる「睡魔」の存在なのだろう。工場は夜の夢の世界の様に閉じている。だが、夢が現実の反映である様に工場は外部から完全に切断しているわけでもない。繰り返し見かけられる多くの車の移動はそのことを象徴している。

ところで、テキスト内には、牛山や古笛と同様に、牛山の兄にも食事のシーンがある。入社直後で要領を得ず昼食にありつかなかった兄を気遣って様々なお菓子が同僚によって渡される場面である。新入社員の研修でも明らかな様に、決まった時間の中で昼食を上手にとることは、労働者たちにとって重要なことである。そういった意味で、兄はまだ工場環境に「馴化」出来てはいない。

「うしやまさん真面目ですわね」カスミさんの顔がぐにやと曲り、中から恋人が出てきて口中をチョコレートだらけにして笑った。「おお」と声が出て目をしばたかせると、カスミさんが「私歯磨きしてきますね」と、手にオレンジ色の歯磨き粉のチューブとピンク色の歯ブラシを持って席を立った。カスミさんがドアから出てから、中年女性（入野井と書いてある社員証が見えた）が酒焼けのようなしゃがれた大声で「アタシも鯛つけしとかなきやあ、カスミさんに取られちゃうわ。ほら、甘いもの好きな

の？」と菊の形の最中をくれた。ビニールの包装の表面に「粟入りもなか・粒あんふるさとの懐かしさ」と印刷してあった。「えー、じゃあ私も」若いがねが（こちらの社員証は見えない）ドロップ形で、先端から細長い紙がはみ出ている銀紙で包んだものをくれた。(58)

ここで、校正による目の疲労とチョココレートの溶けるイメージは、カスミの姿を恋人のそれに変化させる。チョココレートを差し入れるというカスミの行動は、他の同僚にも同じ行為を促し、結果同僚たちの間にコミュニケーションの輪が広がる。こうして、仕切りによって区切られた「同僚」という記号的存在たちが、それぞれの人間として認識されるようになる。その過程で「餌付け」という言葉が使われているのは象徴的である。

「餌付け」とは本来人間が動物にする行為である。そしてその行為の結果もたらされるのは、関係性の変化である。ある動物は「餌付け」される前は、何かしらの種としての名前と呼ばれていたはずだ。それを記号的把握にとられれば、ここでの変化とは、普遍的な記号との関係から、個別具体的な存在との関係への変化ということになる。例えば、通常見かける動物は、種としての動物の一匹に過ぎないが、「餌付け」という行為は、人と動物の関係を変える。換言すれば、種としての眼差しとは、まだ主体が対象の外部に立っていることを意味しており、「餌付け」という行為は、何かしらの形で対象を主体たちの「内部」へと誘ったことを意味する。

こうして、兄も工場の内部に「馴化」されていったのである。しかし、記号が如何様に変化したとしても記号でなくなることはない。そして、そもそも記号自体が、対象と必然的關係を持っているわけではない。昼休みが終わった直後である以下のシーンは、そのことを象徴している。

一時になったので、A3の出力紙にとりかかった。じつと文字を見ていると、日本語もアルファベットもだんだんとばらけ、文字と文字とが意味をもった言葉の連なりではなくなり、意味のない線と点の組み合わせであるのがわかった。記号や模様が無数に並んでいる。言葉や文字というのは心もとないものだ。(60)

「外部」のない校正という「仕事」は、その対象である言葉や文字の記号性をもあらわにする。文字のゲシュタルト崩壊とは、我々がインクの滲みに過ぎないものを、日々見立てているという記号の本質性が露呈された瞬間なのである。

5 断片と統合 — 排中律の融解

牛山佳子とその兄、そして古笛。三人の視線が交錯するテキスト構造について、作家自身はそもそも「断片」であったものを集めたものであると説明していることは、先に述べた通りである。だが、テキスト「全体」を俯瞰できる読者から見れば、内部の表象は様々なレベルで接続し、一つの統合体を指向しているように思える。

大きな工場という視線で俯瞰すれば、正規／非正規にかかわらず、中の構成員に特殊な固有性を認めることは出来ない。

ここに番号が刺繍してあるから」と逸見さんはエプロンのポケットを見せた。「この番号のが牛山さんのだからね。覚えててね。印刷課分室分はまとめて出してから返ってくるから、自分のを選ぶようにね。大体みんな自分の番号メモして入門証のケースとかに入れてくの」私の番号は13458だった。(35)

ここで記号＝番号として社員が把握されていることは、その象徴として見やすいことだろうが、同時に会社の制服は個人の番号が付されながら、その所有も管理も工場内で閉鎖的に完結している。

牛山佳子たちがシュレッダーの対象物に対して如何なる他言も禁止されていることや古笛の仕事が外注されないことなども、工場の閉鎖性を示すものとして理解される。また、シュレッダーや校正以前の書類が何処から来て業務の後何処に運ばれるのか、分からないまま与えられた仕事をしている様子も、それぞれの「内部」の閉鎖性のイメージと強く結びついている。

しかし、こうした各セクションの閉鎖性を「外部」に開いている象徴的な存

在が、様々な社用車と「運輸」と呼ばれる人々の存在である。

で、それで運輸っていう、工場内の荷物の配送とかをしてる人たちが来るのが大体十時と三時」やってくる男たちは背中に「UNYU」と書かれたジャンパーを着ている。彼らはシュレッダーカスが入ったゴミ袋も持っていく。今日初めて見た「UNYU」は筋肉質の小柄な老人で、汗だくになりながら小走りしていた。

(37)

「運輸」は制服、校正原稿、廃棄用紙などあらゆるものを運ぶ。工場内の移動を支える存在である。工場内のあらゆるものは人と人の間を「循環」している。

古笛の研究所は、クリーニング工場の隣であった。

隣がクリーニング工場だと聞いた時は、東側の壁全体がアイロンのように発熱してシューシューうなっているような気がしたが、そんなことはもろんなかった。多少音はしたが慣れれば別に何でもない。むしろ、朝夕クリーニング工場の前を通ると洗剤のいい匂いがするようで、悪くない立地だ。

(45)

このクリーニング工場が、工場内の様々な部署の制服を洗濯し、それらは日々、決まったルートを通る「運輸」によって運ばれている。こうした循環の中で、日々、好きな場所に行き、特定の制服を着ることもなく、好きな様に研究（分類）をおこなうことが出来る古笛は特権的な位置にいらつてよい。一方で、その研究所が自宅であることが、工場の内部に閉じ込められた古笛の位置を象徴しているとも言える。

工場内でここ数年増殖しているという「ヌートリア」は、牛山兄妹とその恋人との会話の中でも話題となり、その死体は「コケ」を媒介として、古笛と老人と孫を結びつける。

パソコンに向かって青山さんに提出するコケかんさつかいの報告書を作成

していた僕はぎよつとして、窓を見た。男の顔に見覚えがあった。コケかんさつかいに孫を連れてきていた老人だ。ヌートリアの屍骸を見つけた男児の祖父だ。どうしてここがわかったろう。ドアを聞けるべきか悩んだが、窓越しに目が合っていて、相手は年長者だ。名前こそ今思い出せないが、孫の顔までよく覚えていた。

(52)

この老人の孫が書いた文章は、古笛に渡される。実際に読まれたかどうかは定かではないが、この文章を受け取る古笛の心情には、「屋上緑化」や「コケの分類」の「仕事」が滞っているという罪悪感がある。

屋上緑化というか、コケの分類とやらは遅々として進んでいないので、職員の家族のためにレポートを読むくらいの奉仕はしよう。工場のために自分ができることはほとんどないということがもうわかっている。「外ではちよつと嫌なのです。お願いしますです」老人はことさらに老人臭い喋り方をしているのだろうか。クリーニング工場に、集荷された汚れ衣類を載せた軽トラがやってきて、クリーニング工場の入口を開けた。錯覚かもしれないが、洗剤の甘い香りがぼつと漂った。

(53)

文章のファイルが古笛のもとに渡ったときも、工場内の様々な制服が隣のクリーニング屋に運ばれている。一方で、工場内の一角にある閉鎖的な空間の窓の中から佳子が見出した風景。

いくつか、平屋や二、三階建ての親しみやすい高さの建物が見え、その屋上や壁が緑色になっているのが見えた。表から見ると工場は灰色ばかりだと思つたが、落ちついて中から見てみれば、そこここに木が植えられ、花壇もあり、屋上や壁にはツタか何かが生えられているのだった。(38)

この風景には、敷地内の緑化計画の一端が反映されている。なかなか進まない緑化事業に対して、一定の成果をうむ仕事として「コケかんさつかい」が開催されているが、そこでは「ズリパン」という自称「妖精」の変質者が警戒さ

れている。この「ズリパン」は「ヌートリア」と同じ様に工場内での噂になっており、そのことが両者を同じ水準のものとして結びつける。

ズリパンは、中年から老年の男性で、森にいて、相手が女性でも男性でもズボンとパンツを下ろそうとしてくるのだという。「森の妖精というのは何なんですか?」「本人がそう名乗るんだそうです」「抵抗したり反撃したりするとすぐに走って森の奥に入る。抵抗も反撃もしない職員はいないの」で、結局パンツを全て下ろされたような被害者はいない。(48)

「ヌートリア」の存在は古笛が着任する数年前から工場内でも話題にはなっていたが、それは、「ズリパン」と同様に明確な被害を伴わず、人々の関心から外れつつあった。古笛の関心は、どちらかと言えば、海で見かけるウの様な鳥の方であったが、それはウが既存の体系では分類不可能なものであるという生物学的関心からだった。それは既存の「変態」という概念では理解されてしまいが故に「ズリパン」を重要視しないという態度と結びつく。

結局ズリパンは現れなかったが、そのかわり、老人の孫が、自由時間に、動物の糞や屍骸の上に生えるジゾウダルマゴケを見つけてきて、彼がそのコケを採集した森の入口に行ってみると大きなヌートリアが死んでいた。腹部にジゾウダルマゴケが密集して生えていて、朔柄がまばらに長く伸び、先に赤く丸い朔をつけて俯いていた。(54)

この行事で古笛と老人とその孫は知り合った。後に、工場内の不思議な生物のレポートを持ち込まれた際、工場内で話題になっていた生物たちは、実は「固有種」なのだと教わる。レポートで扱われた生物は「灰色ヌートリア」「洗濯機トカゲ」「工場ウ」の三種類である。それぞれの種類に関して、「仲間」「大きさ」「色・形」「特徴」が述べられ、「食べ物」「すみ場所」「一生」という項目が詳細に記載されている。

このレポートから分かることは、実に長期間にわたって詳細な観察が積み重ねられていることである。この文章の背景にあるのは、生物たちに関する知的

関心のみであって、その動機はこれらの生物が「固有種」であること、つまりは生物としての「特徴」が明らかに becoming していないことである。

「固有種」がこうした関心によって、調査され報告されることによって、既存の体系に位置づけられる。こういった営みによってなされるものこそが「分類」である。「分類」は参照枠として機能しながらも、新種の発見によって体系そのものが変更されることもある自己循環的なシステムである。つまり、「分類」そのものは、何かに辿り着くことがない可変的な説明概念なのである。だからこそ、「分類」学は、学問なのだとと言える。

従来、分類学を学んでいた古笛は、このレポートをきちんと読んだのだろうか。のちに、レポートはなぜか校正原稿として牛山の兄のもとに運ばれる。おそらく「運輸」によって……。 「仕事」という概念に囚われた古笛は、学問としての分類への興味を失っていた。だからこそ、周囲の生物が工場の人間達にとって有害/無害であるという一般的関心はあっても、特に問題がなければ、動物たちに分類学的対象としての関心を持つとはしない。

レポートでは、動物たちが何を食べどうやって繁殖するのかという部分に大きな関心が寄せられている。もちろん、これらの生物たちは、自分たちがいかなる食物連鎖や生物学的循環構造の中にあるのかを知る由もない。

しばらく歩くと、鳥の密度は増し、ほとんど体を寄せ合うようにして何十羽もの鳥が座り込んでいた。動物番組で見たペンギンの越冬のようだ。寒いのだろうか。中に子供を守っているのだろうか。立ち止まり、身を乗り出して見つめると、ぱっと、鳥の匂いがしてきた。海風と混じった、脂っぽい鳥の匂いである。鳥の羽が濡れて光っている。それぞれの羽を絡めあっている。リーダーが言っていたのはこの鳥であろうか。ごく普通の、巨大でも可憐でもない鳥だ。嘴から脚まで真っ黒だ。たくさんいるというだけだ。(106)

だが、それは、「外部」という視線を持ち得ぬまただ生きている工場内の人間と不思議に重なって来るのである。外部を知ることなくただ共に目の前の「仕事」をこなし、共に食事をとり、そして寝る。同じ日々を繰り返しながら

変化のない生活をよしとする。両者を分かつのは、「外部」の存在を知りうるかどうかだけなのだ。

6 排中律の消滅 — 動物と人間

工場という閉鎖空間を象徴する場所は、工場を西南と北東に分断している「工場大橋」である。南側は市街地への路線バスへと繋がる「外部」への出口、北側は本社ビル、見学者用の工場博物館、倉庫からなる工場「内部」への「玄関口」である。工場内の「移動」は、南に向かって開かれ、北に向かって閉じられてゆく傾向がある。それは、工場内部の描写にも反映されている。

やはり南側にも出入口はあったのだ。しかし外を見てみるとそれは営業車らしい工場のロゴ入り車が数台とめである駐車場で、そのわきには低い蛇口があり灰色のホースとポリバケツが置いてあって、あまり立ち入りたくない雰囲気だった。やはり通勤には北側のドアを使った方がいいようだ。

(38)

物語の最後に、牛山佳子と古笛は、大橋で出会う。ここで出会ったのは人物だけではない。形式、内容の両面で様々なレベルの位相が、このシーンに流れ込んできている。テキストの直接話法の間心内語としての文章が自由間接話法として地の文に流れ込む文体は、人間同士の表層と深層における不思議な乖離を表象して来たが、ここで初めて二つの語りの位相が重なる。

「申し訳ないです」頭を重ねて下げると、相手も、嫌な顔のままだった。頭を少し下げ、あまつさえ「大丈夫ですので、すいませんでした」と言った。相手は謝る必要はないのだが、謝らせてしまった。嫌な間が空いた。沈黙した。こちらが声をかけたのだからこちらが挨拶をするべきだろうと思っ

か。(105)

「申し訳ないです」私は頭を下げ続けている相手に鳥のことを聞きたいと思った。何の鳥なのか。どうしてこの鳥をわざわざ撮影しているのか。「鳥を撮影しておられたんですか？」私が思い切つて聞くと、中年男は、ぎよつとした顔で口を開けた。「はい。鳥を撮っていました」間拔けた声を出して男は激しくうなずいた。「鳥を」と言いながら橋の向こうを指し示した。「何という鳥なんですか？」尋ねると、中年男は驚いた顔で黙った。名前を知らないのだろうか。「どうして鳥のことをお聞きになるんです？」「ええ？」

(108)

同じ様な属性を持ちながら決して交じることのなかった二人の視点人物は、表層的な物語内容レベルでは遂に出会つてはいるのだが、物語言説が喚起する心内レベルでは両者の視線はすれ違ったままである。

(西) 南／北(東) を結ぶ橋では、男／女の「人間」が出逢い、共に「食事(沖縄料理)」をして、「鳥(動物)」の話題をし、共に工場の「疎外」状況を共有する。だが、橋と川が上空から見れば同じ位置にありながら、決してぶつかつてはいないように、佳子と古笛は決して交わらないのである。両者の出逢いは、結果的にお互いの現状を確認し合っただけだった。それは、お互い工場という空間に「馴化」し「内部」になりつつある姿だった。

電話を切ると、首と肩が硬くなっているような気がしたので、ぐるぐるとまわした。そして老人と孫が置いて行ったバインダーを手にとつて、読み始めた。□元がもそもそしたので触ると、髭が随分生えていた。手がちくちくした。何だかわからないが何か数センチほど伸びている。ぎよつとしかけたが、すぐに何ともなくなった。手にもどこにも体中に毛が生えてきたからだ。

(118)

私は仕方なく自分の分のコンテナから紙を掴んでシュレッダーに差し込んだ。しばらく何も考えずにシュレッダーに紙を差し込んだ。そして自分の足もとに置いてあったコンテナの中の最後のひと束をシュレッダーに差し込んだ瞬間、私は黒い鳥になっていた。人の足が見え、腕が見えた。灰色

の塊が見え、緑色も見えた。潮の匂いがした。

(123)

レポートを読む古笛は自身が「灰色ニュートリア」になったのか。ここには「読む／読まれる」「分類する／される」という飛躍の瞬間がある。主体（人間）であることを拒否した古笛は、客体（動物）になったのだ。レポートによると、毛の存在が特徴にあげられているのは、「灰色ニュートリア」の方である。一方、佳子は「黒い鳥」になった。あまり飛ぶことが出来ない「工場ウ」になったならば、近くの海までしか飛んでゆけないだろう。

工場ウを工場の職員が捕獲することがあります。何のためかはわかりませんが。しばらくすると、職員は工場ウの残りがらを海に捨てます。捨てられた工場ウは、そのまま泳いで群れに戻ったり、海に沈んで死んだりするようです。（中略）戻ってきた工場ウは脂気が無くなり痩せ細っているのですぐわかります。群れに戻り、しばらくすると元に戻ります。群れには常に、数匹から数十匹の使用済み工場ウがいます。（92）

工場ウになった佳子だが、それは工場から自由になったわけではない。工場と海をウは「循環」している。それは何のためか分からない。その循環で元気に再生するものもあれば、死ぬものもある。だが、個別別の生死は不明のままだ。これは、工場で働く人間と何が異なるのだろうか。

テキストは、何故か兄の最後を描いていない。兄は「洗濯機トカゲ」になったのか。レポートで描かれる「洗濯機トカゲ」の特徴は、その生きにくさである。

また目が覚めた。汗をかいている。一体このファイルは何だろう。（中略）工場には確かに大河が流れているし、クリーニングをする建物もあるだろう。それはあるだろうが、そこにそんなトカゲやらウやらが生息しているわけがない。洗濯くずを食べるトカゲなどいないだろう。普通トカゲは虫やら何やらを食べるのだ。動物を食べる大型のトカゲも暑いところにはいるだろうが、しかし繊維くずや洗剤は食べまい。（中略）居眠りをしただ

けた。居眠りを誘うようなものばかり読まされる。

(118)

「仕事」が「生き甲斐」であるならば、「居眠り」とは「死」の象徴であろうか。「外部」のない「仕事」は常に「眠り（死）」へ誘われる……。

註

テキストは、短編集『工場』（二〇一三（平成二五）年三月、新潮社）を使用し、各引用の末尾に（ ）にて頁番号を付してある。

- (1) HP上の著者インタビュー。「話題の本ガイド」
(<https://allabout.co.jp/gn/gc/426424/all/>)。聞き手（執筆）は石井千湖。
- (2) 津村記久子「人と職場を、顕微鏡で眺めるような愉楽」『波』二〇一三（平成二五）年四月
- (3) 「選評」『新潮』一〇七巻一一号
- (4) 矢澤美沙紀「ロストジェネレーションの「労働」と文学——小山田浩子を中心に」『神奈川大学評論』八四号 二〇一六（平成二八）年二月
- (5) 註(1)と同じ。
- (6) 吉見俊哉『リアリティ・トランジッド』紀伊國屋書店 一九九六（平成八）年二月
- (7) 三中信宏『分類思考の世界』講談社現代新書 二〇〇九（平成二一）年一月
- (8) ヴィトゲンシュタイン著・野田茂樹訳『論理哲学論考』岩波文庫 二〇〇三（平成一五）年八月